

同窓會々報

庶務部

不肖私等が昭和四年度の幹事として選舉に當選したのは四月廿五日である。即ち其の氏名は

庶務部 堀内義光

會計部 瀧川顯照

運動部 大野學正

辯論部 矢谷智秀

文學部 岡本前能

購買部 松永良詮

購買部助手 紀本孝美

の六名であつて直ちに本年度豫算案の編成に着手し、越えて五月二日午前八時より本學院階上に第十八回定期同窓會大會は開催され、豫算案の承認を了し、正式に就任の挨拶を述べ茲に引繼を了した。此の間僅かに二時間餘例年に無い議事の進行振であつた。

文學部幹事岡本前能君は四月下旬即ち幹事當選の頃より盲腸を患ひ、大會當日も缺席し其の後大宮病院に入院し、五月下旬退院する事を得たが尙ほ療養の爲め郷里に歸省する事となり辭

任を申出でられた。依つて次點者たる近藤惠聰君を以つて補充したのであつた。

購買部幹事松永良詮君も就任の頃より病魔の襲ふ處となり、其后全快軍務に召集され、當初より専ら助手紀本孝美君に依つて處理されて居たが、貸付金額の整理等その功績見るべきものが多い。

六月に入り當學院の古き出身の大先輩たる清水龍山先生は東京大崎町立正大學々長に就任せられ、宗祖棲神の法窟たる吾が身延に登山、宗祖の鴻恩を謝し學長就任の旨を報告し、終つて後輩たる吾々に訓話激勵せらるゝ處があつた。吾々の修養に資する點多々有りし事を感謝して止まないものである。吾が學院より斯かる知名の士を出せる事は、古き歴史を有する學院の誇にあらずして何んであらうか。

同月下旬に至り本會各部部长の更迭發表あり、即ち新部部长の氏名は

庶務部長 鹽田義遜先生

購買部長 中條是明先生

會計部長 永倉唯嘉先生

辯論部長 松木本興先生

文學部長 徳富智徳先生

運動部長 野崎學穩先生

等である。因みに本會々長は學院長杉田日布現下、副會長は教頭高田惠忍先生である。

七月に入り矢張り當學院出身の先輩たる伊藤海開師より活動寫眞を上映して貰ひ度いと交渉ありたるを以て、二日夜身延公會堂に於て映寫す。内容は教育及び宗教映畫にして折柄の暑さにも拘らず階上階下數百名の觀覽者を以つて充たされ、近來稀れの盛觀を呈した。

同十五日例年の如く大阪明淨高等女學校來春卒業の最上級生百數拾名は、教職員引率の許に旅行の途に就き當身延にも參詣された。吾等は客殿に於て歡迎茶話會を催ほし猶此の機會に於て日蓮主義の一端を御紹介する事を得た事は喜びとする處である。

長い暑中休暇を終つて九月早々吾々は揃ふた。次いで同下旬松永良詮君も軍務を果たして歸られた。

十月五日午后七時より辯論部主催にて第四回雄辯大會を身延公會堂に開き、男女青年團は勿論今年は特に京都光山學院及び兵庫縣下本門法華宗尼ヶ崎學林より辯士を招待し、此等の辯士に依り熱辯火を吐く大獅子吼は試みられた。聽衆無慮六百名極

めて盛大であつた。

同夜尼ヶ崎學林辯論部長は親しく吾々と會談したが青年教家の間に於て、斯かる機會を利用して親睦を圖かり將來吾々の手に依つて分派的觀念を排除し合同の機運を促進せしめ度き旨を述べられたが、私としても極めて意を同じうする處である。將來此の事が合同促進への微縁ともなれば幸甚の至りである。

十月十一日より三日間宗祖入滅報恩會式である。吾が同窓會は十二日夜釋迦堂に於て幻燈布教を爲し、終つて通夜説教に移つた。秋の夜は既に寒かつたにも拘らず熱心なる多くの信者達は最後迄座を離れなかつた。眞に文字通り報恩會である感がした。

行先地撰定難であつた旅行の件も富士五山と決定して漸く愁眉を開くに至つて、十一月四日早朝四十余名の者は鹽田教授引卒、大野運動部幹事諸般の庶務擔任の許に出發、同夜は大宮町に一泊翌日午后歸山した。

一部の者は修學旅行に殘餘の者は同じく十一月四日夜七時から池上學林生徒一行廿三名の歡迎茶話會を客殿に開いた。近藤幹事の開會の辭、法主現下の御訓辭に次いで當方より武田海正君の元政上人の詩吟、方哲源君の演説あり、池上學林生徒六、七名登壇交々靈山身延の崇嚴は人貴ければ處貴しの習ひ宗祖日蓮聖人の人格の輝きの流であるの旨を述べて感銘之れを深う

するものあり、松木辯論部長は教師課及び校友會を代表し、私塾より出で、名をなした明治維新前後の名士の例を擧げて激勵する處あり、池上學林教師濱田師は皆歸妙法の理想に眞しぐらに突進する旨を述べ伊藤海開師又母校愛より出でて遂ひに宗門愛に論及し異体同心の祖訓に則るべき事を力説したのである。

最後に不肖私も日連聖人の本覺法門は金剛不壞の法城であり此の法城を共に守るべき人々と親善の契りを結びたる事を欣快とする旨を述べて閉會の辭とした。殘留者一同夜であつたにも拘らず登院致し大いに席場を賑はし呉れた事は唯に私共幹事の感謝するのみにあらず學林生徒に對して多大の満足を與へし事であらう。

以上に於て大略の報告を卒へた。思ふに吾々が其の任にあらずして其職を汚し、大過無くして今日迄會務を處理する事を得たのは一に會員諸君の一致團結せる御後援に依るものにして深く感謝せざるを得ない。私はしみじみと精神的合作の強みを感じ遙かに毛利元成の臨終に際して十矢を東ねて容易に折れざる事を試めし、多くの子等に協力して國を守るべき様訓へた故事を思浮べて愉快に堪えない。此の上とも御後援を御願ひして止まぬ次第である。

終りに外部より本會を御援助下されし方々の御芳名を列擧すれば左の如くである。

- | | |
|--------|-------|
| 一金貳拾圓也 | 清水龍山殿 |
| 一金五圓也 | 貝山殿 |
| 一金五圓也 | 中島なか殿 |
| 一金五圓也 | 遠藤曉諦殿 |
| 一金參圓也 | 二宮龍殿殿 |
| 一金貳圓也 | 三國義圓殿 |
| 一金壹圓也 | 小林貞宣殿 |
| 一金壹圓也 | 某殿 |
- 尙ほ十月五日身延公會堂に於ける雄辯大會の他校辯士二名を宿泊下されし小松海淨師及十一月四日池上學林生徒出迎への松木辯論部長と私に晝餐其他種々御便宜下されし下山上澤寺小松けい殿に對し併せて謝意を表す。
- 四、十一、九、記———
(堀内生)

辯論部

「百萬の大軍恐るゝに足らず、三寸の舌端や眞に恐るべし」とは彼のマケドニアの王ヒリッパが舌神デモステネスに言つた言葉である。時間的に三千年、空間的に全世界を私達が凝視するならば、其處には如何に雄辯が必要であり、又偉大な力を持つてゐるかを知るであらう。

身に寸鐵をも、たずさへずして、一語よく平和を齎しました諍闘を巻き起すものは實に雄辯であらねばならない。

教界は敢て諸君が能辯となる事を望んではゐない。然し法悦に親む人々から其の喜びを分ち與えられん事を眞剣に欲求してゐる。

吾が辯論部一百五十の人達よ、彼のデモステネスが一身を居してアテネの都を救はんとした如く、信仰と慈愛と正義とを以て聖日蓮の魂に、そして乾きに乾ける草の如き心を持つ人々にそれらの法雨を與えようではないか。斯くすると自らなる雄辯は生れる。今毎週一回の辯論會及び山内布教の外に五月以來本部が活躍した略報を記するに……

五月三日より四日 甲府市太田町公園に於て松木部長引卒のもとに左の諸氏を派遣し、交々街頭に立つて大衆に叫びかく
武田海正君、近藤惠聰君、方哲源君。

五月六日より八日に至る釋尊涅槃會に際し幻燈及び道路布教

をなす。

谷川寛徳、最上英俊、三木淨造、矢谷智秀、田代榮正、近藤惠聰、灘上惠教の諸氏及び松木部長（已上幻燈解説）

矢谷智秀、武田海正、近藤惠聰、灘上惠教の諸氏及び松木部長（已上道路布教）

六月八日 午後一時より本學講堂に於て一學期各級選出雄辯大會を開催す、當日のプログラム左の如し。

- 開會の辭
- 伸びんとする力
- 時代は戻る
- 未定
- 健全は偉傑のマザリなり中四
- 小より大に至れ
- 社會改造の起點
- 思想國難の秋
- 未定
- 挨拶
- 閉會の辭

- 中一 佐々尾善智君
- 中二 小浦孝勝君
- 中三 白井玄法君
- 落井良昭君
- 石黒茂一君
- 高五 福山智學君
- 高一 堀内義光君
- 高二 灘上惠教君
- 高三 松木部長
- 堀内幹事
- 六月七日、立正大學主催全國各大學高等專門學校雄辯大會に
武田海正君を派遣す。
- 六月十六、七の兩日宗祖御入山會を期し再び街頭に獅子吼す、

布教に従事の人々左の如し。

矢谷智秀、三木淨達、近藤惠聰、武田海正、堀内義光の諸氏及び松木部長。

六月廿日、上の山六光坊三光天子の祭典に際し乞ひに依り左の諸氏出張布教す。

矢谷智秀君、武田海正君、石黒湛全君。

七月廿日、覺林坊行學朝師の入寂日に左の諸氏布教し、時深更に及ぶ

矢谷智秀、近藤惠聰、武田海正、石井要宏の諸氏、及び結城瑞光教授。

十月一日、宗務院特派布教師平井學俊師の記念講演を乞ふ。

十月二、三の兩日、宗祖六百五十遠忌宣傳部並に本部主催にて柴田顯秀師を招聘し布教講習會をなす。

十月五日、午后五時より公會堂に於て、本門法華尼ヶ崎學林、京都光山學院、男女青年團第四回聯合雄辯大會を主催す、聴衆數百盛大なりき、因に當日のプログラム左の如し。

- 一 開會之辭 幹 事 矢谷智秀君
- 一 獨立 本 學 佐々尾善智君
- 一 何を以てか聖賢に酬ゆべき 本 學 小浦孝勝君
- 一 美しき田園は我等の故郷なり 本 學 末吉元敬君
- 一 思想國難の解決? 本 學 瀧川顯照君

- 一 野人の叫び 光山學院 三浦智見君
- 一 眞宗教への憧憬 本 學 岩田曉親君
- 一 オア―シスを指す 尼ヶ崎學林 池田學進君
- 一 宗教と社會との交渉に就て 本 學 近藤惠聰君
- 一 所感 女子青年 田中とよじ嬢
- 一 勤儉 女子青年 佐野もゝゑ嬢
- 一 直面せる日本を顧て 男子青年 井出逸平君
- 一 現代に生ける婦人として 女子青年 穂坂ちかよ嬢
- 一 現代の風潮と吾人青年の覺悟 男子青年 松田幸一君
- 一 平和の使 本 學 最上英俊君
- 一 芽萌えから成長へ 女子青年 古谷千恵子嬢
- 一 斷呼して權力萬能を排す 尼ヶ崎學林 小林貫翁君
- 一 物質文明に對する宗教道德の簡見 本 學 吉田孝秀君
- 一 現代宗教一斑を論ず 本 學 福澤觀教君
- 一 日蓮主義と村青年 男子青年 穂坂 寬君
- 一 理想への進展 光山學院 岡元 鍊清君
- 一 闇暗の十字街頭に立ちて新宗教を求め尼ヶ崎學林 安立清雄君
- 一 久遠のあゝがれ 本 學 武田海正君
- 一 宗祖に懐かれて 本 學 灘上惠教君
- 一 挨拶 辯論部長 松木本興先生
- 一 閉會之辭 幹 事 堀内義光君

十一月十二日、宗祖鶴林會に際し午后七時より釋迦堂に於て幻燈布教宗祖一代記、及びそれに續いて通夜説教をなす。幻燈解説並に通夜説教の人々左の如し

最上英俊、矢谷智秀、三木淨達、武田海止、近藤惠聰、堀内義光の諸氏及び松木部長（已上解説）

矢谷智秀、福山智學、遠藤是孝、大橋潮吉、平野龍亨、近藤惠聰、吉田孝秀、石井要宏、堀内義光、石黒堪全の諸氏。

——（矢谷生記）——

運動部

運動!!此の言葉はなんぞなく力強い感を興へる、春の若葉萌立つ様な青春の意氣が窺われる。世の向上發展と共に運動は世界的に旺盛になつて來た。而も近時運動熱の旺んな國程先進國なる事實で運動が眞に理解されて來た事であると思ふ。或る人は云ふ『三寸の舌頭良く大政を左右す』亦或る人は云ふ『住して目を千里の外に走す』大いに然り、文辯能く人心を支配し國の危急存亡を救ふ。而し文辯亦肉体を離れては存せず故に其人の功績の大小は總べて身体の健不健に依る事は言を要しない、今や國事多端の時『健全なる精神は健全なる身体に宿る』千古不磨の金言は愈々其の光輝を新にし來たのである。

此處に於てが眞の寂光土世界の巖山たる靜かな祖山に學ぶ我々も本化別途の大法を學ぶと云ふ事のみを以て足れりとしては居られない、渦巻く社會の人心を觀ては今更に現在將來の多事を思ひて身体の鍛錬に志さずには居られない、斯ふした眞の意味の運動に志す人の逐次にふへて來た事は眞に喜ばしき事である。

吾が運動部は庭球部、劍道部、弓術部の三部より成つてゐる。今左に部分けして簡単に説明をすれば

庭球部 當部は約三、四十名のテニスマンがあり隨分盛大である。從來コートが一個所丈しかないので往々練習者の意に添はぬ事は残念である。が西谷に第二學期より寄宿舎が設立され、寮生の丹精により近々の内にコートも設置さる事である、此の六月十日に下部に於てコート開きに際し、當學院より三組の選手を派遣す。又十月二日身經中學校に於て明治神宮の縣下郡市對抗豫選大會に二組の選手を派遣し、各選手奮闘努力の結果好成绩を以て祖山の面目を拍す、廢した外部の刺激もあるので益々盛大となる。

劍道部 當部は是又四十名の會員を有し一昨年初段の筒井君一級の清瀨君の去るに及んで一時落款していたが今年新入の大平、藤井の諸君一級に二名、二級に三名、三級に四名、四級に八名、五級に三名、六級に三名、七級に十名、新入者拾四名の部

員を有し春季大會には盛大に行なわれ來學期の寒稽古納會には昇級試合を行ふ積りである、當部に於て最も感謝すべきは當運動部長野崎先生と身延小學校の訓導小野正夫氏の熱心なる御教導である、祖山の劍道は兩先生に依り益々旺盛に成りつゝあるは實に嬉ばしい次第である。

弓術部、當部は僅か十四名の部員に過ぎないが運動場が狭い爲に練習場の造られない事は遺憾である、其の内に良い地所を見付け完全な射的場を作り大いに發展を期そう。

最後に會員諸君『永世の闇を照すてう燈臺守は誰なるぞ』と歌ひ叫ぶ諸君よ眞の意味に於ける運動をして益々發達せしめ以て心身共に壯健を期し此の校歌をして意義あらしめん事を望んで止まぬのである。

——(大野生)——

文學部

社會文化の中心を行くものに、筆と舌との二つがある。此の筆舌の向ふ處、其處に嚴正なる社會批判の烽火は掲げられ、よりよき社會の出現を望み得る事が出来る。

近時出版界の洪水期に際して、吾が祖山に於ける唯一の文學的使命を持つものに雑誌『棲神』がある。即ち世の所謂自然主義的文學とその選を異にして、時代救済の前線に立ち惱める社

會大衆をリードするは勿論、内、祖山文學の粹を發揮してゆくものなる事は、今更言をまたないであらふ。

棲神刊行復活第二年に當る本年は、特に祖山に於ける凡有方面を網羅して棲神を洪湖に送りたい念願から、諸先生、並に校友諸氏に御寄稿を忝うし、併せて、各學友會をも列記し、尙本學々報をも發表させて頂いた事を、此上もない喜びとするものである。尙從來棲神の原稿が始むど反古同様にされ、何等反みられなかつたものを、圖書主事江利山先生、松木、徳富兩先生の指導に依つて九冊に製本し、長く本學圖書館に納める事が出来た。更に近く棲神に干しての、所謂初刊已來の文獻、及寫眞數葉を整理して、同様納める期の早からん事を切望するものである。

吾々は常に世の文學を愛好すると共に、所謂宗門文學の中に三大寶策のある事どもを胸に忘れず、聖祖の行學二道増進の爲めに、止暇斷眠の研究を必要とするものである。

終に際して、校正の不備編輯の不振等を冥々も深謝すると同時に、之が一つのコペルニクスの轉回と爲つて、來る可き年の發展を深く祈ると共に、左記書籍、雜誌を御寄贈下されし諸氏に厚く感謝する次第である。

大阪佛敎

岡島 伊 八 殿

社會事業研究

全

大阪毎日新聞

全

天業民報
身延教報
立正
覺醒
傳導
閑の光
信友月報
あさひ
奉仕
斯民
宗教
宗報
明治
人道
瑞雲
慈善新報
六大新報
弘濟會報

以上

天業民報社殿
身延教報社殿
高松立正社殿
大阪覺醒社殿
大阪傳導社殿
京城閑教社殿
名古屋信友社殿
大阪あさひ社殿
佛教奉仕社殿
中央報德會殿
教發行所殿
宗務院殿
天業民報社殿
人道社殿
村雲婦人會本部殿
慈善新報社殿
六大新報社殿
弘濟會報社殿
(近藤生)